

分散会 10

司会者 川中 幸子

記録者 井上 英明

会場責任者 遠藤 敏朗

NPO法人 大分県「協育」アドバイザーネット（大分県）

人と本を結ぶ読書支援プロジェクト「ゆい（結い）」

国は2000年を「子ども読書年」と定め、それを機に学校での保護者による読み聞かせグループや有志による読み聞かせグループが一気に増えました。そのような中、未来を担う子どもたちのためにどのように読書支援に関わっていくかを共に考えていくことを目的に、私たちのプロジェクトは生まれました。「子どもたちの読書支援に関わるネットワーク」と

大学が深いかわりを持つ関係から、「学生読み聞かせボランティア」2つを組織し、さらに、家庭における親と子の関係においても読み聞かせは大切と考え、産婦人科医院の協働で絵本の読み聞かせを薦める活動も展開しています。学校と地域、家庭を結ぶ一つの力となることを目標に、乳幼児から小学生親子、中・高・大学生、大人への読み聞かせや朗読等、様々な活動を行っています。



佐藤 真由美 氏

NPO法人 NEXT CONEXION（愛媛県）

よのなか FACTORY

小学生から社会人に至るまで、年代や状況にあわせたプログラムやイベントを通して、政治や人権の大切さを楽しみながら理解することで、よのなかを舞台に「知り」「考え」「行動する」こども・若者の育成を目指しています。

よのなかとつながった学びを通して、自分とよのなかの関係を知り、子ども達の自主性・協調性・想像力を育むことで、学校など教育活動における学びのきっかけを作ると同時に、よのなかの仕組みに関心を持ち、よのなかへの参画意識を育てること、「子どもたちが将来、市民としての十分な役割を果たせる」ために、知り・考え・行動することを目的としています。



小並 優斗 氏

とべっ子志縁倶楽部（愛媛県）

砥部中学校学校支援ボランティア

とべっ子志縁倶楽部は平成25年12月20日、砥部中学校の働きかけによって発足しました。私たちは、学校の求めに応じて、家庭や地域と学校が一体となって子どもたちの生きる力を育むことを目指して活動しています。

主な活動内容は、放課後学習講座の支援、学校図書館の運営支援、登下校の安全確保の支援などです。

現在27名の会員がいます。短い時間ですが、学校へ出向き生徒とふれあうことを楽しみにして活動しています。



○ 佐藤真由美さんの発表から

- ・「ゆい（結い）」のネーミングは、一般公募（HPにて）で決定。語源は、沖縄の言葉「ゆいまーる」。ゆいは「協働」まーるは「順番」。「誰もが互いに信頼し合い、心から支え合う社会に向けて、一人一人が小さな力を出し合い、連携し合って歩いていく」という意味がある。
- ・「ゆい（結い）」の想いは、子どもたちに「素晴らしい本と出合わせてあげたい」「本との居心地のよい時間を過ごさせてあげたい」という想いと、本を通して人と人が出会い、その繋がりや輪を広げたいという想いがある。（詳しい活動内容は報告書及びHPで）
- ・読書支援でつながった仲間でも技術的にも精神的にも高め合っていきたいが、今後どう展開すればよいか、また、個人的な活動と組織としての活動との兼ね合い等についても悩んでいる。

<質疑応答>

Q：読み聞かせを行った小学生にとって、それが本を読むきっかけとなっているか。

A：小学生からは、とても楽しかった、心が温かくなったなどの感想を得ていることから、きっかけになっていると思う。読み聞かせをした本を、後で読んだと言われるとうれしい。

Q：読み聞かせを行う対象が、読み手の側になることはあるのか。

A：自分一人で読めない本もあるので、5年生くらいだと手伝いをしてもらっている。

Q：幼児・小学生などの子どもに対しては、どんな心構えで活動を行っているのか。

A：その時間が楽しくなるようにしている。朝の時間や会って間もない場合などは、気持ちが暗くなるようなものは避けている。大人が感動したからといって、子どもにそれが受け入れられるかどうかはわからないので十分配慮しないといけない。

<感想・意見交換>

- ・読み聞かせや活動の対象が乳幼児から高齢者まで多岐にわたっていてすばらしい。
- ・学生の姿勢（一生懸命さや時間をかけての選書等）から学ぶことが多い。
- ・昔から読み継がれている本は、大切に受け継いでいきたい。古いもののよさや想い、願いを若い世代と積極的にコミュニケーションを図って伝えていきたい。
- ・大人を対象に読み聞かせをするときには着物で行うなど、常に相手のことを考えて活動されているところが素晴らしい。
- ・今回の発表は、これからの自分について考えるきっかけとなったので、とても感謝している。

○ 小並優斗さんの発表から

- ・11月23日（月）に松山市立姫山小学校を会場として実施した「こどもタウン」の事業を紹介。こどもタウンとは、子どもが仮想社会の中で、仕事をし、お金（仮想通貨 itto）をもらい、納税をし、もらったお金でゲームができたり、サービスを受けたりできるイベントである。楽しみながらよのなかのしくみを学び、体験することをねらいとしている。
- ・今回のイベントでは運営スタッフ6人、当日スタッフ30人、子ども約100人が参加した。
- ・子どもたちは、様々な職業（銀行員、新聞記者、劇団員、カフェ店員等）に就いて働き、対価として銀行で給料（納税分を差し引いたもの）を受け取り、それでゲーム等を楽しんだ。
- ・職業体験的な要素が強くなってしまった。また納税等の内容が1年生には難しかった。
- ・今後、松山市や愛媛県に広げていきたい。学校の授業のプログラムに入れてもらえるような活動にしていきたい。

<質疑応答>

Q：小学生対象の内容であるが、中学生バージョンはないのか。

A：今はないが、今回参加した6年生には、将来、運営スタッフとして参加してほしい。

Q：保護者の感想はどうか。

A：保護者は約30名が見学した。保護者の感想として、働いて稼ぐことがいかに大変かということ子どもが体験できたことを喜んでいと聞いている。子どもを通して保護者にもこのイベントのよさを知ってもらって、まちづくりにつなげていきたい。

<感想・意見交換>

- ・とても楽しそうなイベントで、子どもたちが遊び感覚で学べることがすばらしい。
- ・会場提供の依頼に来られた時、まちづくりへの情熱を強く感じた。若い人が頑張っていることがすばらしい。教育委員会の後援や公民館、まち協等との連携をしっかりとることなどをアドバイスした。今回のイベントを1過性のものとしなくて実績を積み重ねてほしい。
- ・PTAや地域を巻き込むことが大切である。子どもが変われば大人も変わる。
- ・祖父母世代に働きかけるのもよい。高齢者の知恵や能力を生かすことも大切である。

○ 田中弘さんの発表から

- ・田中さんが砥部中学校に校長で赴任された時に、学校が新築できれいであったことから地域の方にも来てほしい、使ってほしいという想いがあった。一方、このころ校内では、生徒がしんどい状況にあった。そうしたことから、地域の方に学校に来ていただくと考えた。
- ・教師と子どもの縦の関係にボランティア（第三者的関係）を入れ、三角形の関係を作った。
- ・構成員は、地域住民、保護者、元教員。町の教育委員も参加している。
- ・基本スタンスは、子どもたちの活動を見守るという姿勢で行っている。
- ・保護者も子どももボランティアも、学校も地域も、みんなにとってよい活動となっている。

<質疑応答>

Q：支援ではなくて「志縁」という言葉を使っているのはなぜか。

A：地縁、血縁が薄れている社会の中で、志の縁で集まることから志縁を使った。無償で行っており、立ち上げの時に教育委員会の協力を得てユニフォームを作った。

Q：活動していて、困ったことはないか。

A：生徒はしんどい状況にあったが、どのようにすればよいか見通しはあった。本事業の効果かどうか不明だが、子どもが変わった。学校の窓口は、教務主任。コーディネーター的なことは私が行っている。地域の方に呼びかけると、賛同者ややりたい人が登録してくれた。

<感想・意見交換>

- ・ボランティアが不在の時、中学生にいつもの付き添いの人がいまませんと言われた。それだけ自然と中学生の中に定着してきている。学校からもやもやとした気持ちで帰るのではなくて、放課後学習講座にきて、自分が分からなくても納得して帰ることが大切である。
- ・教師の理解と協力で、部活動と並行して行っている。選択肢がいくつかあった方がよい。
- ・校長がやろうと思えば大抵のことはできるが、校長だけの思いで進めると失敗するので、地域の実情、子どもの実態、教員の思い等を把握した上で実行するとよいのではないか。
- ・困難な状況にある場合は、チームで対応するようにするとよい。